

2022年10月2日 半田朝礼拝

午前 9時00分・10時30分

司会 藤條聡彦

奏楽 大谷京子

前 奏

招 詞

ローマの信徒への手紙 第12章1節

讚美歌

讚美歌 21-208-1 (主なる神よ)

交 読

詩編 第89篇1節-19節 (p. 97)

祈 禱

聖 書

ローマの信徒への手紙 第10章1-13節

(新約 p. 288)

讚美歌

讚美歌 21-280-1 (馬槽のなかに)

説 教

これまでマルコによる福音書を数年かけて聞いてきましたが7月で終わり、次のことを考えました時に、婦人会の例会で使徒信条をご一緒に学んだことを思い出し、この礼拝でももう一度使徒信条に焦点をあててみ言葉に聞いていこうと思

います。そこで第一回目の今日の説教題は、「信仰を言い表す」としました。それは使徒信条が「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず**」という言い方から始まるからです。「われは信ず」ということを、特に信仰を告白するという視点からみ言葉に聞いてみようと思っつけてつけた題です。信仰とは告白するものです。今日の聖書箇所、ローマの信徒への手紙第10章の9節、10節で「**口でイエスは主であると公に言い表し**」、あるいは「**人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる**」と書いています。ここで言い表すと訳されている言葉の、もとの一番の意味は、同じことを言うという意味です。同じ言葉、同じ事柄を口にする。そこで告げられる事柄に、これこそ真理ですと同意する。確認する。そして、自分も同じことを口にするようになる。ですから、教会というのはお互いがどうして一つになって、一つの共同体として一緒に生きていくことができるのか。それは、同じ性格の者が集まっているというのでもなく、同じ趣味の者が集まっているのでもなく、また同じことをやりたいと思っている者が集まっているというのではありません

ん。同じ告白、同じ信仰の言葉を語るができる者がここに
召し集められているということです。

そのようにして教会を造ってきたいくつかの信仰告白の
中で、一番古い歴史を持っているもののひとつが、使徒信条で
す。おそらくこれは、このローマの信徒への手紙が送られたロ
ーマの町の教会で、まず生み出されたものだろうと言われま
す。使徒信条は、わたしたちが属している日本キリスト教団で
も、その信仰告白の中に入れられているものです。ですから、
ある教会が日本基督教団に属しているということは、その教会
が、この使徒信条を自分たちの信仰の表現として受け入れてい
るということを意味します。そして、それに日本キリスト教団
独特の信仰理解を表す、前文と呼ぶ文章をつけたのが、教団の
信仰告白であり、先日の大矢兄弟の洗礼式の時にも読ままし
た。

そして、率直に言えば、わたしたちもすべて洗礼の時に

この使徒信条の信仰を、その言葉を受け入れたのです。たとえこの半田教会で洗礼を受けていなくても、他の教会で洗礼を受けても、皆同じことです。ただどうでしょうか。そう言われるといろんなことを考えるかもしれません。これは既に受け入れたものです。今も当然受け入れるものです。これが、自分の信仰の内容ですと言わなければならないとすると、これは、少々たいへんだぞ、おとめマリアより生まれ、とか、よみにくだり、とか、からだの甦りとか、どうもわかりにくい、飲み込みにくいものがまだあるように思う。自分はこうしたことをきちんと納得していただろうか。そう改めて考えるかもしれません。そういうことは、めずらしくありません。伝道者の中にも、神学者にも、使徒信条を、まだ十分に自分の言葉にすることができないと悩んだ人はいくらでもいるからです。ただ、ここに挙げられている言葉は、基本的には、どれも聖書が語っている言葉です。使徒信条の中で、聖書が語っていないことを語っているところはひとつもありません。聖書が語っている事柄をできるだけ要約したものです。これだけは信仰の内容として

言い表してほしい、口に出して言ってほしい、これだけは同意してほしい、これだけは、心に信じて、口で言い表してほしい、そういう願いを込めて世々の教会がこころをこめて磨き上げた表現がこれです。

そこで、改めてローマの信徒への手紙に聞きますが、この10節の言葉は、第10章の中でも特によく知られているパウロの言葉だろうと思います。「人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」。この文章は一種の対句をなしています。心で信じることと、口で言い表すこととはひとつのことです。どうしてかという、そうでないと、義とされるということと救われるということとがバラバラになってしまうからです。ここでは義とされるということと救われるということとは同じことです。心で信じて義とされるところまでは行ったけれどまだ救われていない、などというとんちんかんなことはありません。わたしたちは、心で信じたら、それを言い表さざるを得なくなります。

どうしてそうなのでしょう。そして、どうしてわたしたちは、同じように理解しないのでしょうか。それはわたしたちが信仰について理解する時に過ちを犯すからだと思います。わたしたちは、神さまを信じることを、何よりもそれは、自分の心の問題だと考えます。それは、ある意味では、あくまでも正しいかもしれませんが、けれど、そうやってしまうと、信仰は、結局心の持ち方だとか、心の体験なのだということになるからです。しかもそれを、口で言い表す信仰の告白と分けてしまいたがる。もしかするとわたしたちは、言葉というものをあまり重く見ていないのかもしれない。どちらかと言うと言葉に言い表した信仰ということになると、何かむずかしいものに結びつけて考えてしまうから閉口する。それよりも、言葉で厳密に言い表されたものよりも、漠然と感じ取るようなもの、心と心とが触れ合ったら通じてしまうような信仰の気分、信仰の体験らしきもののほうが、価値がある様に思ってしまうことはないのでしょうか。けれどここでは、信じることと、それを口に出

して、言葉にして語るということが大切なのだとパウロは言います。

ではそこでの言葉とはどういう言葉なのでしょう。パウロは9節でこう言います。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる」。ここにはふたつのことが強調されます。ひとつはイエスが主であるということ、もうひとつは、神がイエスを死者の中から復活させられたということです。このふたつのこと、これは、当時、このローマの信徒への手紙が書かれた頃の教会の洗礼式でも聞かれた言葉ではないかと推測する人がいます。まだ使徒信条も出来ていなかった頃、洗礼を受ける人に、「あなたはイエスを主と信じますか、あなたはそのイエスを神が死者の中から復活させられたことを信じますか」と問い、「はい、信じます」と言ったら、洗礼をすることができました。そう推測します。このふたつは、これはとても大事なことです。あなたにとって、イエスがどのような方になっていく

ださるかという事実、そして、そのイエスを神さまはどうなさったかという事実、それを受け入れるかということを、それだけを問うています。

洗礼にあたって役員会がお尋ねすることは、あなたはどのようにして洗礼を受けたいと思うようになりましたか、そのあなたのお気持ちをお聞かせくださいということです。もちろんそれは、ただ気持ちだけではなくて、その人の体験をも語ることを求めていると考えられます。こういう人に出会った、こういう体験をした、それで神さまのことがわかった、そういう答えを求めます。けれど、使徒信条にしても、このパウロが語る信仰告白についての言葉にしても、そういう入信のきっかけや体験などに興味がない。これは大事なことです。教会の洗礼式で大事なこととしたのは、あなたは何を信じたかということです。あなたは何を認めるのですかと尋ねます。しかも、自分がどんな神体験をしたかということを認めるというようなことではありません。イエスがあなたにとって主であるという事実を認め

ますかということです。神さまがイエスを甦らせたということ
を認めますかということです。そういう意味では、どういう動
機でも構いません。動機や体験が大きくても小さくても、そん
なことは関係ない、ほんとうにつまらないきっかけからであっ
ても構わない。大事なことは、このふたつの言葉が語り、のち
に使徒信条がもっと丁寧に語るようになった神さまの救いの事
実を認めるということです。これを同じ言葉を自分も語るよう
になるということです。自分の独特の言葉を語って得意になる
ことではありません。皆と同じことを言うようになるというこ
とです。

これは6節と7節でパウロが語っていることと関係があ
ります。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。
これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません」。いった
い人間の中のだれが天にまで上るのかなどと言うな。人間の理
性や感覚において、人間が天にまで上るなどとは言いにくいか
もしれない。でも、キリストは天にお上りになったのだ。その
キリストをひきずり降ろすようなことを言わないようにしよ

う。あるいは、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。これは、キリストを死者の中から引き上げることにあります」。使徒信条は、キリストはよみにまで下ったと言います。死者のところまで行かれたのだと言います。その時に、「だれがそのような地獄まで降りていけるのか」などと言うな。他の人間はいざ知らず、イエス・キリストは行かれたのだ。それを認めよう、それを大事にしよう。たとえそういう表現、そういう事実が受け入れにくいと思っても、それを言うな。言わないで、この信仰の言葉を受け入れようと言います。これは、信仰を持っていない人たちに向かって言っているのではありません。自分の感覚から言って、イエスが天に昇られたとか、地獄に行かれたなどとは言いにくい。自分には考えにくい。こういうふうに自分には考えにくいと思うものは、みんな取り除いてしまって、自分の気に入ったものだけをかき集めて来て、これが自分の信仰の告白でございませうと言った時に、わたしたちが実は何をしているかと言うと、神さまのみわざ、神さまそのもの、イエス・キリストそのものを、わたしたちの小さな、貧し

い器に合わせて小さくしてしまう。神さまを小さくするので
す。神さまのみわざを小さくしてしまうのです。パウロはそれ
をやめようと言っているのです。

どうして、イエスさまのそのようなみわざに同意するこ
とが大切なのか。6節、「**信仰による義**については、こう述べら
れています」。パウロが言いたいことはこういうことだと思いま
す。ここで言い表す信仰、教会が語り、わたしたちが語ってい
る言葉、それを受け入れるということは、無理やりに、納得し
ようがしなかりょうが押し付けられるということではありませ
ん。何やら自分にはよく分からない七面倒くさい理屈を、自分
のからだに合わない着物を無理に身に着けるように、飲み込ま
なければならないということではありません。ここでパウロが
一所懸命に言っていることは、信仰による義ということですよ。
ユダヤの人たちがどうしてもそこから抜けられなかったよう
に、律法によって義となる、神さまの前に正しい人間として立
つことができるようになれると考えるのではなくて、まったく

ただ信じればよい。神さまが自分を義としてくださることを徹底的にただ信じればよい。パウロはただひたすらそれを言い続けました。わたしたちも同じです。

ただそこで問題は、ただ信じればいいのだと言う時に、その信仰とは、わたしが自分でこれこそ誠実なことだと認めることができるような誠実な判断、それが信仰だと思い込むことです。特にプロテスタントの場合は、自分の信仰を重んじますから、自分の信仰について、自分らしく潔癖であろうとする。その潔癖な心が受け入れることができるものだけが、信仰だと思い込みます。

パウロが語る義というのは、わたしたちが正しい立派な行いをするようになる、そこに義が生まれるということではありません。そうではなくて、聖書が語る義というのは、わたしたちが神さまと正しい関わりに立つということです。とにもかくにも、神さまと正しい関係ができるということ

です。神さまと正しいお付き合いができるということです。そしてはっきりしていることは、わたしたちの方からは、神さまと正しいお付き合いなどできなかつたということです。だからパウロは第3章で「正しい者はいない。一人もいない」と書きました。その時に、その八方塞がりのわたしたちのためにイエスさまがお生まれになってくださった。ポンテオ・ピラトのもとで苦しんでくださった。十字架につけられて死にまで駆けつけてくださった。そして、その死人の中から、神さまは、イエスさまを甦らせてくださった。主は天に昇ってくださった。そのように、使徒信条は、何か理屈を書いたのではなく、イエス・キリストにおいて、神さまがいったい何をしてくださったか、それを語ることを第一とする文章です。そんなふうに神さまがご自分の方から主イエス・キリストを通じて道を開いて、わたしたちと正しい関係を造ってくださった。この事実を認めるということが、信仰によって義とされるということです。

11 節以下で、パウロはこう言います。「聖書にも、『主を

信じる者は、だれも失望することがない』と書いてあります。ユダヤ人とギリシャ人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです」。パウロはここで、この信仰を共に、一緒に言い表す者は失望に終わることがない。どんな時にも望みを失わない。自分の罪や死の現実に向かっても崩れることはないと言います。どうしてでしょうか。わたしたちが偉いからでしょうか。そうではありません。わたしたちがそれだけの悟りを開いているからでしょうか。そうではありません。ただイエス・キリストを信じているからです。使徒信条が語る言葉を思い起こすことができるからです。死の世界、陰府の世界、そこもイエスさまがすでに赴かれたところなのだと思えば、恐れはなくなるのです。

そして最後に、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」という言葉をパウロは書きました。主の名を呼び求めるというのは、礼拝をするということです。主の名を呼び求める

者、折あるごとに教会に集まり、主の名を心から呼ぶ者、「主の名を、喜びをもって呼ぶ者」、そのすべてに例外なしに救いが与えられます。先ほどご一緒に交読いたしました詩編第 89 篇の 16 節と 17 節にはこうあります。「いかに幸いなことでしょう 勝利の叫びを知る民は。主よ、御顔の光の中を彼らは歩きます。絶えず、御名によって喜び踊り 恵みの御業にあずかって奮い立ちます」。この言葉は、とても美しい言葉だと思います。この言葉がわたしたちにも与えられています。教会の礼拝に与えられる美しさそのものを語る言葉です。祈ります。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さま。今心をひとつにしてみ言葉を聞くことができ感謝いたします。本当に大きな賜物をあなたからいただいたと思います。これを大切にしていけることができますように。わたしたちを神の子としてくださるあなたの恵みを、この信仰を言い表すことが出来ますように。主のみ名によって祈ります。 アーメン

讚美歌 讚美歌 21-441-1 (信仰をもて)

献 金 讚美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讚美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>